

SONRISA そんりさ

Vol.153



「コロンビアを伝える旅」

札幌市の「みんなる」で、アイヌの方々との交流イベントに参加するコロンビア・アワ民族のリーダー、ホセ・メロ・チンガルさん（2015年6月3日）＝「コロンビア・スピーキングツアー」

- | | | |
|----|---------------------|----------------|
| 02 | コロンビアスピーキングツアー | …… 柴田大輔 ・ 都築仁美 |
| 10 | サッカー・コロンビア代表の絆 | ……北澤豊雄 |
| 16 | エクアドル・インタグ鉱山開発現地報告 | ……一井リツ子 |
| 18 | パンも本もー児童文学研究・普及センター | ……伊香祝子 |
| 19 | ラ米百景「上野英信の思い出」 | ……伊高浩昭 |
| 20 | ペルー音楽「ワイニョの広がり」 | ……水口良樹 |
| 22 | メキシコの食「モトゥル風 卵料理」 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 23 | ニュースクリップ | ……サザエ |

コロンビア・スピーキングツアー2005

柴田大輔

コロンビアからアワ民族のリーダー、ホセ・メロ・チンガルさんを招致し、紛争の現状と将来への希望の物語を共有するため開催した「コロンビア・スピーキングツアー2015」が、5月23日の広島講演からスタートし、6月13日の東京「谷根千・記憶の蔵」までの間に6都市で全15回のイベントを行い、無事終了することが出来ました。

その内容をご報告したいと思います。



夕食後に、ギターで歌を聞かせてくれたホセさん。（2015年5月20日）

1. きっかけ

私はコロンビアの紛争と、そこで暮らす主に先住民と呼ばれる人々に興味を持ち、2006年より取材を続けてきました。その中で出会ったのが、今回日本へ招致したホセさんと、彼が属するアワ民族社会に生きる人々でした。

アワ民族はコロンビアの南西部、隣国エクアドルと国境を接するナリーニョ県を中心に、3万人余りがコロンビア、エクアドル両国に暮らしているといわれます。多くの地域で独自の言語「アワビッ

（Awapit）」を公用語スペイン語とともに使い、雨量の多い暖かい地域で自給自足に近い生活を営んでいます。

コロンビアは政府軍と反政府ゲリラ（コロンビア革命軍、民族解放軍）による国内紛争が50年に及びます。近年最も暴力の被害を受ける場所の一つが、アワ民族も暮らすナリーニョ県です。ホセさんが暮らす自治区マグイはその中でも2000年以降、大きな犠牲を払ってきた場所の一つに挙げられます。

私は2013年2月から2014年8月にかけて延べで約8ヶ月間、マグイを中心に現地で生活を共にし、日々を記録してきました。

コロンビアでは2012年から国内最大の反政府ゲリラ・コロンビア革命軍（FARC）と政府間の和平交渉が続けられ、紛争終結へ向けた大きな流れの中にあります。しかし、その紛争の舞台となる地域では今も戦闘が続き、埋設された地雷、空爆の痕、住民が去った家々など、紛争の痕跡が生々しく刻み込まれています。

マグイでは15年程前から各武装グループの勢力争いに巻き込まれ、戦闘の激しさから2006年には約300家族の住民のうち、およそ9割が避難民化するほどになりました。

それでも人々は生まれ育った故郷に強い愛着を持っています。この地で再び新しい未来を築いていこうとする住民の思いを聞きました。そして、長年住民の先頭に立ち、学校建設や、外の世界との架け橋となるなど、自分たちの将来を見据えた活動を続け

るリーダー・ホセさんが持つ、紛争後の地域再生への中心となる「歴史的記憶の家」建設への強い思いに心を動かされました。この家は、紛争の歴史と民族にとって生きるために必要な文化と心を後世に伝えるための場所となります。

2. 講演を通じて

広島からスタートしたこのツアー。結果として広島から始められたことは、ホセさんの心に大きな刺激を与えることとなったようでした。原爆ドーム、平和記念資料館、韓国人原爆犠牲者慰霊碑、原爆の子の像、それぞれに込められた思いに深い感銘を受けていました。またここでホセさんは、自分たちの生活を犯している戦争が他の世界でも起きてきたということを肌で感じ、「世界の中のアワ」という視点を持つようになっていました。マグイに作る記憶の家に世界地図を描き、コロンビアの中にあるマグイを記す。同時に世界各地で今起きている紛争地を書き込みたいと言います。コロンビア人でも殆どの人が知ることもない辺境の地で起きている紛争、そ



原爆ドームを訪ねる（2015年5月23日）



愛知県立大学での講演後、学生の皆さんとの交流会に参加。（2015年5月27日）

こでひたむきに生きてきたホセさんの目が鮮やかに広がった瞬間のように感じました。

その後の講演活動は、京都、愛知、北海道へ。北海道では二風谷、静内、白老でアイヌの方々を訪問し交流することが出来ました。そこから茨城、最後に東京。1ヶ月あまりの滞在で15回の講演をこなし、その合間に様々な場所で交流会をし、休みなく動き続ける毎日でした。

彼は、習慣も似ている隣国のエクアドルには行ったことがありますが、それ以外の異国は初めて経験でした。言葉、食べ物、習慣など、日常の中の多くのことが違う日本で、嫌な顔すること無く動き続ける姿に頭が下がる思いでした。心配していた食べ物も、肉じゃが、煮魚といったものから、刺し身、納豆、梅干しといった特別なものまで、どれもぺろりと平らげてくれました。驚かそうと思って出した納豆ですが、「これはウマイ」と、ホテルでは毎朝食べるほど。「招かれた食事は、平らげるのが礼儀」という彼らの文化も背景にあるようでしたが、どれも美味しそうに食べてくれ、ホッとしました。講演を重ねる中で、彼は会場とのやり取りをもっと大切にしたいという思いを強くしていきました。講演後に質問応答があります。そこで答えきれなかったことが、イベント終了後の交流会に持ち越され、

より深い会話に繋がります。アワの身に起きていること、そこからの思い、自分たちが大切にしていること、それらに強い関心を持ってくれる人がいることに彼は強い喜びを感じていました。その背景には、コロンビア社会が決して先住民族に寄り添うものではなく、自分たちの声が響いていなかったということがあります。

ツアー後半では、あえて早めに講演から質疑の時間へと移していきました。場所によっては1時間を超える長時間の質疑もありました。会場ごとに、それぞれの色で熱を帯びていく様に、近くで見ている興奮するものがありました。彼はそれをこの場にいて全ての人との「知恵と信頼の協働作業」だとい、自分たちの日常で大切にしていることだと説明しています。

彼の地域を作る礎は住民による協働作業から成り立っているといえます。例えば、道路に草木が伸びてきた場合、学校や集会所など公共の施設を作るとき、住民は自分の仕事の手を一旦止めて、力を出し合い作業をします。金銭は伴いません。世代を超えた人々が同じ目的に向かって力を合わせる中で信頼が生まれ、それぞれの知恵が行き来し共同体に命が吹き込まれます。

3.北海道、アイヌ民族との交流

北海道では講演以外にアイヌ民族の方々を訪ねて交流をしました。

平取町二風谷地区では、文化を残す活動をされている貝澤耕一さんの自宅敷地内のログハウスに泊めていただきました。貝澤さんは「NPO法人チコロナイ」という団体の理事長を務め、集められた寄付金をもとに土地を買い、そこにアイヌ民族の伝統衣装を編む繊維のもととなる木々を植林する活動をしています。はじめに苗床を作り、それから数年たってから山に植林します。苗作りから繊維を取ることが



アイヌ民族・貝澤耕一さんが植林する山で貝澤さんの話を聞く。（右・貝澤耕一さん）（2015年5月31日）

できまで40年かかるということを聞きました。貝澤さんは「自分が生きている間には結果を目にすることはできないでしょう。でも、気がついた人がやらなければいけない。これは、人が生きていくために大切な仕事だから」と話します。文化を受け継いで行く事の重要性を語ったこの話にホセさんはとても共感をしました。彼が、地域再生のために作ろうとしている「歴史的記憶の家」。これは紛争の歴史を後世に伝えるための場とすることとともに、それだけではなく、文化をはじめとするその土地で生きていくために必要な「心」を継承していく場でもある、「心の家」だと話します。

ホセさんのこの家にかかる強い思いがあります。マグイでは多くの人が紛争を原因とする暴力で命を失ってきました。ここで何が起きたのかを自分たちの目線で後世に残すことが大切だということを彼は語ります。また、紛争で傷ついた地域を再生していくためにはその土地に伝わる文化が大切だといいます。その象徴的なものが「伝統的医師」と呼ばれるものです。主に、土地にある植物で、病や怪我に対処することがありますが、それはその医師の仕事の一つでしかないとホセさんは考えています。その医師にとって最も大きな役割は「心」に作用するところのものだといいます。

それは倫理とも置き換えられる気がします。私たちの生活の中で生まれた習慣、価値観に基づく倫理をもとに、人の心を正しい方向へと導くことが伝統的な医療だといいます。

背景にあるのは、町に出た若い人と町の若者の間で起きてきた軋轢と、紛争で故郷を去らなければいけない人が、町で自分の生き方をできずに経験した苦勞があります。ホセさん自身、幼いころに受けた先住民族だということに対する蔑みの悔しい記憶があります。

二風谷に滞在中に、アイヌの方の語り場の席を訪ねました。アイヌの伝統的な家の中で、囲炉裏に火をくべ、土地の作物で作った軽食を摘みながら年配者の話に耳を傾けました。会場には、20人ほどの男女様々な年代の人が話を聞きに来ていました。そこでアイヌの年配の男性が小学生の頃、学校でアイヌであることを理由にいじめを受けたという話をしていました。ホセさんはその話を聞き「どこの世界も同じなのか」となんととも悔しそうな表情をしたのが印象に残りました。

もう一つ、アイヌの方との交流で印象的だったことが、白老町のアイヌ民族博物館を訪ねた際、中を案内してくださった学芸員である若いアイヌの男性との出会いです。彼は私たちに、ひとつひとつ丁寧に展示物の解説をしてくださいました。目の前にあるものと、それにまつわる物語り、背景、とてもわかり易く聴くことが出来ました。その話しぶりには、自分の属する民族に対する敬意と愛情が端々から感じる事が出来ました。こちらの質問に対して、的確な分かりやすい答えをしてくれました。若者が胸を張って外部の人間と向き合う姿にホセさんはとても感動をしていました。

アワの若者は、町でアワ以外の人々と向き合うとき、自分たちが「違っている」ということを隠そう



茨城県山間部の農村を訪問。空き家ばかりの酒楽を見てホセさんは「ここには私たちが求めている電気アスファルトの道路、土地があるのに何故人々は去っていくのか？」と疑問を持った。（2015年6月8日）

とすることが少なくないそうです。そこには、馬鹿にされるんじゃないかという怖さがあるのだといいます。

ホセさんが暮らすマグイでは今、アワ語を話す人は殆どいません。50年前のマグイの話を聞くと、日常的にアワ語でやり取りがされていたと聞きます。ですが、町に出た時に蔑まれた経験が、自分自身の文化を「劣ったもの」と考え、子どもたちにアワ語を教えることをやめてしまった歴史があります。ただ、町から離れれば離れるほど、今もなおアワ語が日常的に使われている地域が沢山あります。

ホセさんは、この白老で出会った青年のように、自分たちのことを胸を張って人に伝えられる若者を育てたいといいます。それにはやはり、教育が大切だと思いを新たにしていました。

4.スピーキングツアーを終えて

今回のツアーを通してホセさんにとって大きかったことは、自分の声に沢山の方が耳を傾けてくれたことだと言います。前述しましたが、コロンビア人でも殆どの人が知らないような辺境で暮らす彼らの

声は、長い間外に響いて行くことがありませんでした。それは例えば、地域に学校がなかった時代に政府からの支援を受けられず、自分たちで山から木を切り出し、校舎を建てたこと、増水の度に危険が増す川に橋を架けるために、住民が直接町に出て支援者を探したことなどに現れています。そして外の世界で受けてきた差別。

講演を重ねて行く中でホセさんが伝えたかったことは以下のことに集約されていきました。それは、自分たちの価値観による正義で、山で生きるために必要な大切な習慣、文化を守り、自分たち自身で社会を作り運営していくこと。これが、これまで外から持ち込まれた戦争によって、また、それ以前は、他の社会から見た価値観で受け続けた差別によって傷ついた人々、社会が尊厳を持って新たな未来を築いて行くために最も大切なことだと語りました。

彼がしつこいほどに口にしてきた「信頼と知恵の協働作業」という言葉があります。新しい未来を築くためには違いを乗り越えて、より多くの人を手を取り合、知恵を出し合う事が必要だというホセさんのシンプルだけど、力強いメッセージ。そこには、彼らが対峙している大きな問題を前に生きていかなければならない状況から出てきた考えだと思います。



メルセス修道会にてシスターを前に講演後質問答えるホセさん。（2015年6月10日）



上智大学での講演で、紛争の厳しい状況を説明後、ホセさんは来場していたコロンビア駐日大使へ感想を求めた。（2015年6月10日）

ホセさんの伝えようとする姿には、私にとっても大きな学びとなりました。

例えば、東京で2泊お世話になっていたメルセス修道会の2日目、その日の午後には上智大学での講演が予定されていました。残りの日程はこの日を入れてあと2日。私もホセさんも、実はクタクタになっていました。ですがその日の朝食後、ホセさんが「ダイスケ、シスターたちを集めてくれないか？講演をやろう。彼女たちにも話を聞いてもらいたい」と言い出しました。正直、疲れていた私はできればやりたくないと思い、「みんな仕事があって忙しいよ」と、おそらく嫌そうな顔で言ったのだと思います。それでも彼は「聞いてきてくれ」と言います。

結局シスターたちに話をすると、喜んでくれてお昼の時間に人を集めてくれました。30人ほどの方々の前で1時間半あまりホセさんとシスターとの「ミンガ」が始まったのでした。

ホセさんに密着した1ヶ月間、こうした凄みを感じる場面に何度も遭遇しました。

おそらく気の利かない私に対してイラッとした場面も一度ではなかったと思います。それでも私は彼とだから、最後までやり遂げられたのだと思います。

今回、この企画を始めるに当たり、準備の段階から本当に沢山の方々のご協力をいただきました。感謝の仕様がありません。

また、各会場へお越しいただきました皆さまとの出会いは、ホセさんにとって、自分たち自身の存在を肯定する大きな力になりました。改めまして、皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

この経験をどう繋いでいけるのか、考えていきたいと思います。

◆コロンビア・スピーキングツアー2015 日程

5/20 ホセさん来日

23 広島県広島市・講演（アステールプラザ）

24 京都府京都市・講演（かぜのね）

26 京都府京都市・講演（同志社大学）

27 愛知県長久手市・講演（愛知県立大学）

30・31 北海道・アイヌ民族訪問（二風谷、静内、白老）

6/1 北海道札幌市・講演（北斗高校、北海学園大学）

2 札幌市・講演（北海道大学）

3 札幌市・講演・交流会（フェアトレード雑貨&レストラン「みんたる」）

5 茨城県水戸市・講演（茨城大学）

6 水戸市・講演・交流会（水戸市国際交流センター）

8 茨城県常陸太田市・農家訪問

9 東京都・講演（立教大学）

10 東京都・講演（メルセス修道会、上智大学）

12 東京都・講演（Transit Café Colors）

13 東京都・講演（谷根千・記憶の蔵）

◆同時開催・コロンビア写真展

「辺境の故郷（ふるさと）」

5/12～/22 広島市留学生会館

5/25～/28 同志社大学

5/25～6/6 水戸市国際交流センター

6/1～/19 上智大学（コロンビア関連ブックフェア同時開催）

ホセさんと過ごした5日間

都築仁美（コロンビア・先住民族の声を聞く札幌の会）

ホセさんと過ごした5日間

みなから慕われ尊敬されるリーダーというのは、あのような風格、佇まいを備えているものなのか。ホセさんについて思い出すのは、まずこのことだ。表情や声、ふるまいのすべてに品と威厳が漂っている。しかし、カリスマチックでもなければ、近寄り難くもない。周囲の人へと開かれた雰囲気がある。

北海道で出迎えた私たちを惹きつけたホセ・メロ・チンガルさん、そして今回のツアーを見事にやり遂げた柴田大輔さんと過ごした時を振り返ってみたい。

二風谷～文化と歴史を伝える取り組み

早朝の飛行機で新千歳空港に到着したホセさん、柴田さんと共に向かったのは平取町二風谷。日本で最も先住民族アイヌの血を受け継ぐ人々の比率が高い地域だ。出迎えてくれた貝澤耕一さん、美和子さん夫妻は、有機農業を営んでいる。挨拶をすませた後、貝澤さんの農場で収穫された食材を使う蕎麦屋で昼食をとることになった。ソバや新鮮な野菜の天ぷらを味わう傍ら、注目を集めたのが、ホセさんが肩から下げていたポシェットだった。植物の繊維を縫った1本のヒモで編み上げられた伸縮性のあるその袋は、美和子さんら同席した女性たちの話題の中心となった。アイヌの女性たちも、シナの木の皮を材料にサラニプという山菜の収穫など様々な用途に使う袋をつくる。それぞれの文化の中で受け継がれてきた手仕事に寄せる関心が、初対面の気恥ずかしさや、言葉の壁を超える大きなきっかけになった。

昼食後は、耕一さんにNPO法人ナショナルトラストチコロナイの森を案内してもらった。チコロナイとは、「私たちの沢」という意味のアイヌ語だ。開拓によって自然林が伐採され、カラマツ林となってしまった土地に、アイヌ民族が古くから利用してきたオヒョウなどの樹木を植林し、森を蘇らせようという数十年、数百年先を見据えた取り組みだ。



耕一さんには、翌朝、二風谷ダムも案内してもらった。記憶している人も少ないと思うが、このダムはアイヌ民族の聖地に建設された。アイヌ民族として国会議員も務めた萱野茂さんと、貝澤正さんが、土地の強制収用に對して裁判を起こした（正さんが亡くなった後は、息子の耕一さんが裁判を引き継いだ）。ダムは建設されてしまったが、裁判では土地収用の違法性と、アイヌが先住民族であることが認められた。

ホセさんの暮らすマグイの近隣でも、先住民族が管理してきた土地に、ダムの建設計画が持ち上がっている。アイヌの権利と自然を踏みつけにした開発を、ホセさんはマグイの自治と伝統、そして未来に重ねつつ受け止めたようだ。

ところで、ホセさんを迎えるにあたって、実行委員会で意識したことの一つが、「記憶の家」の参考になるような場を訪れることだった。そこで、萱野茂さんがアイヌの文化を継承するために、自らアイヌの民具を集めてつくった萱野茂二風谷アイヌ資料館を訪問した。現在、萱野さんが集めた民具の多くは、平取町立二風谷アイヌ文化博物館で展示されているのだが、そちらもあわせて見学した。

また、その晩、町立博物館内のチセ（アイヌの伝統家屋）で、「ユカラと語りべ」という催しが行われた。地域の人がアイヌのウウェペケレ（物語）や、自身の経験を語るというものだ。2人の年長の男性が、小学校時代の楽しかった運動会や辛いイジメ、貧しかった暮らしを語った。聴きに來ていたの

は、殆どが地元の人で、話し手の言葉によって自身の経験を思い起こす年長者もいれば、真剣な表情で耳を傾ける年若い人もいたのが印象的だった。ホセさんも彼らの話に、自らの経験やアワ民族の置かれている状況を重ねたようだ。両博物館でみたこと、聞いたことを「記憶の家」の参考にしてもらえるだろうか。

白老～若きアイヌとの出会い

二風谷のあとは、静内を経て、白老のアイヌ民族博物館を訪れた。博物館では、アイヌ民族の職員・山道陽丸さんがさわやかな笑顔で迎えてくれた。展示や伝統舞踊を見るだけではなく、湖に浸されていたシナの皮の利用方法を聞いたり、子どもの頃に陽丸さんがガム代わりに口にしたという植物をみなで頬張ったりもした。また、彼自身の手でアイヌ文様を施した木彫りをホセさんへのプレゼントとして準備してくれていた。ホセさんは、年若い陽丸さんが、民族の文化に深い関心と知識を持ち、堂々と楽しそうに話してくれたことに強い感銘を受けていた。

札幌～高校生との交流

札幌では、私が非常勤講師をしている高校で話をしてもらった。生徒たちは、地域のリーダーが持つというホセさんの杖と、リボンの色が示す象徴的な意味に強い関心を寄せ、ホセさんが色とりどりのトウモロコシの写真をみせながら話してくれた多様性の共存について、深い共感を示した。また、アワ民族への差別と貧困によって子どもたちの学習が困難にならないよう、山の上の自治区内に学校を建てたことに感動していた。私たち実行委員と同様にホセさんの佇まいにも感じる場所があったのだろう、「かっこいい」「イケメンすぎる」という声が多数聞こえた。

この他に、北海学園大学と北海道大学を会場に一般市民を対象とした講演会を開催した。それぞれ充実した内容だった。



アワ&アイヌnight

ホセさんと柴田さんが北海道で過ごした最後の夜には、文化交流を目的とした会を開いた。プログラムの前半では、柴田さんによるアワの人々の日常などを写した写真を観賞した。活き活きとした表情を写しとった写真の数々から、柴田さんとマガイに暮らす人たちとの信頼関係がみえてくるようだった。後半では、「フンペシスターズ」と「ピリカシムカ」という2つのアイヌ民族女性のユニットが、唄や踊り、民族楽器の演奏などを披露してくれた。とても充実した贅沢な時間で、プログラム終了後も、何人もの来場者が会場に残り、ホセさんや柴田さん、アイヌの女性たちと交流を深めた。

最後に

今回、考えさせられたことのひとつが、コロンビアにおける先住民族の立場だ。日常での差別が見受けられる一方、伝統と自治を維持するための自治区が存在する。ホセさんが自治区内に建てた学校には政府からの財政的支援がある。先進国と呼ばれ、一応は「平和」であるはずの日本で、アイヌ民族の権利はどの程度認められているのだろうか。

コロンビアと言えば、ガルシア・マルケスと、麻薬に内戦にマフィアといったイメージしかなかったが、別の面から知りたいという欲求が生まれた。いつかコロンビアの地に足を踏み入れてみたい。同時に、訪問先や交流の場でたくさんの方々の人柄に触れ、もっと深く知りたいという気持ちにもなった。このような機会を与えてくださった方々に心から感謝したい。

サッカーコロンビア代表の絆

北澤豊雄

サッカーコロンビア代表は2014年のブラジルW杯で史上初のベスト8進出を果たした。日本代表にも圧勝して一大旋風を巻き起こしている。筆者はW杯の期間中、コロンビア国内のあちこちを回っていた。代表選手の関係者を取材していたのである。そのうちのいくつかは日本のスポーツ誌に発表することができたのだが、お蔵入りになった原稿も少なくない。W杯からちょうど1年が経った今、それらをふまえて、「コロンビア代表はなぜ強かったのか？」を振り返ってみたい。

「ファルカオは世界でも指折りのゴールハンターだ。虎のように相手のゴールに襲いかかる。だから、ティグレ（虎）と呼ばれているんだ」

私の目をじっと見つめながらそう語るのは、ラファエル・カルロというコロンビア人である。彼はフランスサッカー一部リーグの「モナコ」に所属するコロンビア代表のエース、ラダメル・ファルカオの従兄弟である。2013年12月15日の日中だった。コ



ファルカオの従兄弟のラファエル・カルロ。手にしているのはファルカオ直筆サインが入ったTシャツ

ロンビア北部の商都サンタマルタ市内のダウンタウンを私たち二人は歩いている。

暑い日だった。路面を焼き尽くすような日射しが容赦なく降り注いでいる。私たちは猛暑にうんざりしながらタクシーを拾った。目的地はファルカオの生家だった。

首都ボゴタをバスで北上しておよそ18時間、カリブ海に面する人口約45万人のサンタマルタを目指したのは、W杯で日本との対戦が決まったばかりのコロンビア代表のキーマン、ファルカオの周辺を取材するためだった。

2014年ブラジルW杯まで、あと半年――。ラファエルは32歳、コロンビアサッカーリーグの名門「ジュニオル」のディフェンダーとして2002年までプレーしたが、右足を怪我して20歳で引退。今は求職中だが、「働くのは好きではない」と大きな体とは裏腹に弱々しく呟く。

私がサンタマルタを訪れたのは3度目だった。土地勘もあった。タクシーの運転手やサッカースタジアムの係員などに聞いて回った末に出会ったのが、ラファエルだった。首尾よくファルカオの生家へ連れて行ってもらえることになったのだ。

コロンビアサッカー界の歴史

2014年ブラジルW杯は6月に開幕した。コロンビア代表の下馬評は当初から高かった。エースストライカーのラダメル・ファルカオが、メッシ（アルゼンチン代表）やクリスティアーノ・ロナウド（ポルトガル代表）と肩を並べる世界屈指のストライカーだからである。

ところが、ファルカオは大会の5ヶ月前に所属先クラブの試合でタックルを受けて負傷してしまう。左膝の前十字じん帯損傷と診断され、W杯への出場があやぶまれた。仮に出場できても万全な状態ではない。日本のメディアは嬉々としそのことを報じ

た。なにしろ日本代表がグループリーグを突破する上での最大の難敵がコロンビアだったからである。

ファルカオとはどのようなプレイヤー、人物なのか。

その前にまずはサッカーコロンビア代表について簡単におさらいしておこう。

W杯初出場は1962年のチリ大会。このときはグループリーグで敗退。2回目の1990年イタリア大会はグループリーグを突破し、ベスト16に進出。そして3回目の1994年のアメリカ大会。これが、後々までコロンビアサッカー界を苦しめるトラウマとなった。

この大会の南米予選でコロンビアはアルゼンチンに5―0で圧勝して世界のサッカーファンを唸らせた。南米のサッカーといえば、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイの3国が主流だったにも関わらず、突如としてコロンビアがその一角を脅かしたからである。

ところが、肝心のW杯アメリカ大会はグループリーグであっけなく敗退してしまう。前評判があまりに高かっただけに、コロンビア人は落胆した。格下のアメリカ戦ではオウンゴールまで献上してしまったほどだ。

話はそれだけで終わらないのがコロンビアという国である。

オウンゴールを献上したコロンビア代表ディフェンダーのアンドレス・エスコバルが、帰国後にコロンビア第二の都市メデジン市のレストランの駐車場で射殺されてしまったのだ。コロンビアの試合に絡む巨額の賭博金が動いていたための報復とも誤射とも言われているが、真相は今もって闇の中である。

これが引き金となったわけではないが、以降、コロンビアサッカー界は低迷期に入る。コロンビア代表の名は世界のサッカーシーンから消えかけていた。

そのような状況のなかで久々に誕生したスタープレイヤーが、ファルカオだった。彼の登場で、コロンビアサッカー界は息を吹き返し始めていた。

サンタマルタ時代のファルカオ

私たちはサンタマル市内の路上で黄色いタクシーを拾い、ファルカオの祖母が住む彼の生家に向かっている。冷房がよく利いた車内は涼しくほっと息をついたがラファエルの口調は熱い。

「ファルカオは世界でも指折りのストライカーだ。日本人には悪いが、ファルカオは日本戦で2、3点は取るだろう」

ラダメル・ファルカオ・ガルシアは1986年2月10日にサンタマルタ市の中心に位置するボスケ地区で生まれた。父のラダメル・ガルシア・キンとその弟のアレックス・ガルシアもプロサッカー選手として国内のクラブで活躍した。さらにその弟のヘルベル・キンは俳優としてコロンビアでは知られている。ファルカオの名が欧州で轟く以前からサンタマルタでは実によく知られた一家なのだった。

ラファエルがタクシーを止めさせた。

ファルカオの生家が目の前にある。

胸が高鳴った。

ボスケ地区はコンクリートづくりの低い家が軒を連ねる落ち着いた場所である。生家の向かいの開業医と飲料水専門店、東隣の洗車店以外は閑静な住宅街である。高さ2メートルほどの黒い鉄柵で覆われたファルカオの生家＝写真＝の柵内では、番犬の黒いドーベルマンと今年で80歳になるファルカオの祖母、デニステン・ダニエス・ガルシアが日なたぼっこをしていた。これから来客があるらしく、品の良い深緑のワンピースを着ていた。



突然の来訪にも関わらず、祖母は人懐っこい笑みを浮かべて少しだけ応じてくれた＝写真右。

——日本とコロンビアがW杯で対戦することになりました。

「私はサッカーのことは何も知らないのよ。ただ相手がどこであろうと彼は力強く闘うわ。うちの家系にはサッカーの血が流れているから」

——ファルカオの子ども時代のことを教えて下さい。

「そうねえ、今ではティグレ（虎）というニックネームがついているけど、とんでもない。とても可愛い子で、大人しくて、素直に言うことを聞く子だったわ。この家には生まれてから4歳までしかいなかったけど、プロサッカー選手だった父親に連れられて近くの練習場でボールと遊んでいたわ」

ファルカオは父の移籍に伴い5歳から9歳までの約4年間に隣国ベネズエラで過ごしている。父とともにベネズエラ国内の3チーム3都市を渡り歩いた少年時代のファルカオが目覚めたスポーツが、意外にもベースボールだったという。

「彼は運動神経がいいから、スポーツならなんでも出来るのよ」

ファルカオの幼き頃の写真まで見せてくれたうえで、飲み物まで馳走になった。この家には現在、ファルカオの祖母とその娘の家族が住んでいる。

サンタマルタ市内のダウンタウンの飲食店には、ファルカオを模した等身大の立て看板があちこちにあった。

レストランで「ファルカオの取材に来た」といえば、店員は頼んでもいないのに表情を綻ばせて大盛りをサービスしてくれた。タクシーの運転手も宿泊の従業員もディスコで出会った遊び盛りの女の子も、ファルカオの名を出すとみんな自分のことのように喜んだ。

だが、私がそのことの真意を知るのは、もっとあとになってからである。



ボゴタ時代のファルカオ

サンタマルタへ行く直前の2013年12月5日、私は首都ボゴタの「アル・アンブラ公園」でファン・パブロ・パロミノという男に会っていた。中流層が多く住むアパート郡の中に忽然と現れるその公園はサッカーの練習場にもなっている。柿色の日没を背に子どもたちがサッカーの練習に興じていた。少年サッカークラブのチーム名は「フェア・プレー」。ファルカオが9歳から15歳まで所属したクラブである。

ファン・パブロはファルカオと元チームメイトで、現在はこのクラブの総監督を務めている。ファルカオの当時の印象について聞くと、口元を緩めて語ってくれた。

「あの親子は、どこのクラブのファンだったと思う？ レアル・マドリード？ マンチェスターU？ どれも違う。ヤンキースのファンなんだよ。アメリカ野球の」

とはいえ、ベネズエラからボゴタに越した親子は一転、フットボール漬けの毎日を送るようになる。9歳のファルカオが入団したのが、町の少年サッカークラブにあたるこの「フェア・プレー」だが、当時はコロンビアの2部リーグに所属する「ランセーロ・フェアプレー」という名のプロチームだったのだ。

ファン・パブロが当時を振り返る。

「ファルカオのデビューは13歳のときだ。今の彼はサッカー選手としてはそれほど身長は大きくないほうだけど、当時は成長が早かったせいか大きくてね。それ以上にプレーが大人びていて冷静だった。大人に混じって試合に出ていても遜色ないんだよ。ほかの大人はまさか彼が13歳だとは思わなかっただろうね」

ファルカオの特徴についてはこう話す。

「どこからでも、どんな体勢でも正確なシュートを打てる。それも、ヘディングもキックもどちらもね。性格はどちらかというと大人しいほうで、常に相手の言動を尊重するタイプだ。それがピッチに立つと一転して荒々しくなる。そのギャップが大きくて当時はびっくりしたよ」

続いて彼はこんなエピソードを思い出す。

「あれは彼が入団して2年目、11歳ぐらいのときだったかな。クラブの下部組織の大会に《トゥティ・フルーティーカップ》というのがあって、彼はそこで得点王になったんだよ。数年前まで野球をやって

いたのにね。子供ながらちゃっかり賞金までもらっていた」

「フェア・プレー」は当時も今も人間形成の教育にも力を入れているという。

「汚い言葉を使ったりするとコーチや監督に怒られるんだよ。挨拶ももちろん大事。人間関係において相手を敬うことも叩き込まれる。サッカーだけを教えるクラブにしたいくないというのが創業者の考えなんだ。そんな環境で育ったせいか、ファルカオは読書家でインテリ」

15歳のときに、コロンビアを離れて、単身でアルゼンチンに渡った。国内の名門クラブ「リーベル・プレート」で頭角を現すと、ポルトガルの名門クラブが彼に目をつけた。「ポルト」と呼ばれるそのクラブでゴールハンターとしての天賦の才が一気に開花した。その後はスペインの「アトレティコ・マドリード」とフランスの「モナコ」を経て2014年の夏からは世界有数のビッククラブ、「マンチェスター・ユナイテッド」へと活躍の場を移したのだった。

W杯のメンバー決定

2014年6月上旬。W杯開幕の直前、日本のスポーツメディアは落ち着かなかったに違いない。W杯にのぞむコロンビア代表の正式メンバー23人にファルカオが入るかどうかが注目されていたからである。

私はこのとき、ボゴタにいた。友人の家でメンバー発表の記者会見をテレビで見っていた。ファルカオはしかし、1月に負傷した怪我からの復帰に間に合わずメンバーから漏れてしまった。

この事態を日本のメディアは例えばこう報じていた。

《サッカーコロンビアのラダメル・ファルカオが、所属するモナコの試合で負傷したひざの回復が間に合わないため、W杯ブラジル大会を欠場することを明らかにした。（中略）ペケルマン監督は、「悲し



「フェアプレー」時代の
13歳前後のファルカオ。

い日だ」と語った。「ファルカオが大会を欠場することを発表しなければならないなんて、とてもつらいことだ」》「2014年6月3日」(AFP)》

怪我からの復帰に間に合わずメンバー選考から漏れたのか、ファルカオ自身が身を引いたのか、そのあたりは曖昧なままだった。私は記者会見の生中継を友人たちと見ていたのだが、テレビに映し出されたファルカオは、「私は万全な状態ではない。だからメンバーに入るわけにはいかない。ほかの人に悪い」と目元を潤ませながら語っていた。メンバーから漏れたというより、自分から辞退したという色合いが強かった。

この数日後、私は再びファン・パブロに会っていた。ファルカオが9歳から15歳まで所属した「フェア・プレー」の元チームメイトで現総監督である。私がかつて住み込みで手伝いをしていたボゴタの日本食レストランに彼を招待したのである。

W杯開幕まで、あと1週間というときだった。

私たちは天ぷらをつつきながらサッカーの話に興じていたが、どこか気持ちは浮かなかった。ファルカオが出場しないW杯なんて……。私は彼がポルトガルリーグの「ポルト」に所属しているときからのファンなのだ。そのファルカオが出場しないW杯なんて……。

ファン・パブロは私のそんな心中を察したのか、向かい合うテーブル越しで顔を近づけて、声を低めた。

「ファルカオの関係者は知っていることだが、彼はメンバー選考から漏れたのではない」

私ははっと顔を上げた。胸がとどろいている。

「ファルカオは自分から代表を辞退したんだ。監督はファルカオをメンバーに入れていた。コロンビアサッカー界の象徴で、南米予選は彼のおかげで勝ったようなものだからね。怪我の具合がどうであれ、監督は絶対にファルカオを連れて行くつもりだった。チームメイトも誰もが異論はない。ところが、

「フェア・プレー」の現監督、
ファン・パブロ・パロミノ



反対した者が一人だけいた。それが、ファルカオ本人なんだ。万全な状態ではない自分がメンバーに入るわけにはいかない。ほかの人に申し訳ない。フェアではない、とかたくなに固辞したらしいんだ。監督が説得しても無駄だったらしい」

選考漏れではなく、やはり辞退なのか。

ファン・パブロは話の矛先を少し変えた。

「今年の1月に負った怪我は、相手陣内のゴール前でドリブルをしているときに後ろからタックルを受けたものだ。明らかに相手のほうが悪いのに、彼はすぐにマスコミに語ったよ。『スポーツなんだから仕方ない。相手を責めないで欲しい』とね。W杯の開幕を5ヶ月後に控えていたときだ。にもかかわらず愚痴ひとつこぼさなかった。そういう男なんだよ」

ファン・パブロは表情を硬くした。

「これはあくまでも俺が関係者から聞いた話だけど、コロンビア代表メンバーは、ファルカオがみずから代表を辞退したことを知って、泣いたというんだ。そして、ミーティングで誓ったというんだ。そんなファルカオのために、我々は今回のW杯で絶対に優勝しよう、と。ファルカオが出場しなくて俺も

多くのコロンビア人も悲しいけど、だからこそ、コロンビア代表は団結して一大旋風を起こすような気がする」

コロンビア代表の快進撃

2014年6月12日、ついにW杯が開幕した。

ファルカオのいないコロンビア代表は、22歳の童顔の司令塔ハメス・ロドリゲスがチームを牽引し、初戦のギリシャ戦を3―0で難なく通過。2戦目のコートジボワール戦も2―1で乗り切った。そして3戦目は1.5軍のメンバーで日本を4―1で蹴散らした。90分にハメスが決めた鮮やかなループシュートは日本との格の違いを見せつけた瞬間でもあった。

続くベスト16のウルグアイ戦でハメスが放った左足のボレーシュートは大会ナンバーワンと言われるほど華麗なゴールだった。2―0で勝利を収めて史上初のベスト8進出を果たした。新生コロンビア代表とハメス・ロドリゲスの名は世界のサッカーファンにインパクトを与えた。

ベスト4をかけたブラジル戦は2―1で惜しくも敗れたものの、ハメス・ロドリゲスは大会得点王に輝き、コロンビア代表は惜しまれながらブラジルを去ったのだった。

7月6日、コロンビア代表が凱旋帰国した。彼らの到着を待つボゴタの「シモン・ボリーバル公園」は朝から異様な熱気に包まれていた。自国を史上初のベスト8に導いた英雄たちの凱旋パレードを見に集まったおよそ12万もの人々は祝福の歓声を上げていた。

私はこのとき迂闊にも人混みで財布を擦られるアクシデントに遭遇したのだが、会場でハメスはこう語っている。力強い声だった。

「今回の勝利をファルカオに捧げたい」

私はその1週間後に帰国の途についた。コロンビアを発つ前日、ファン・パブロに電話を入れた。す

ると、取材協力の礼を言うまもなく嬉々とした声が返ってきた。

「どうだ、俺の言った通りになっただろう。コロンビア代表は歴史を塗り替えた。記録も記憶もどちらもね。ファルカオのおかげだと思わないか？ 君は日本に帰ったら、日本のメディアにそのことを伝えてほしい。史上初のベスト8進出の最大の立役者は、ラダメル・ファルカオかもしれない、と」

私は積年の宿題を果たせた気分である。

サッカーコロンビア代表はなぜ強かったのか

――。

仲間のために代表を辞退した男が、チームの心をひとつにしたのではないだろうか。

フットボールは国のイメージを変える力を持っている。

ファルカオはフランスリーグの「モナコ」(2015年6月10日時点)で、ハメスはスペインの「レアル・マドリード」で活躍を続けている。世界を代表するフットボーラーとして、二人は欧州サッカー界で連日スポットライトを浴びている。

コロンビアといえば麻薬とゲリラとコーヒー。いや、コロンビアといえばラダメル・ファルカオとハメス・ロドリゲス。いつか、そんなことを言われる日が来るのを私は待ち望んでいる。

(参考文献)

『Radamel Falcao ― Superestrellas Del Futbol Colombiano―』Elizabeth Levy Sad, Esteban Eliaszevich (Mason Crest) 2013.1

エクアドル・インタグ鉱山開発 現地報告

一井リツ子

南米エクアドル・インタグ地方は、世界の森林の1パーセントという希少な雲霧林、世界の植物の15~17%、鳥類20%が存在し、ホエザル・メガネグマといった絶滅危惧種が多数生息する非常に豊かな生態系が育まれている。20年程にもわたる度重なる鉱山開発危機は1990年代の日本のJICA/三菱マテリアルによる試掘に端を発し、2004年からのカナダのAcendanCopper(現在Copper Mesa)、そして現在はエクアドル鉱山開発公社ENAMIとチリの銅山開発公社CODELCOによる合併事業としてLlurimagua鉱山開発(銅・モリブデン)が強行されようとしている。そして現地では開発反対者への人権侵害など深刻な事態が引き起こされている。開発予定地村長だったハビエル・ラミレスさんは「反逆罪・テロリズム」という罪状で不当逮捕拘留されたまま10か月が経とうとしているなか、私達は今年2月この地を再び訪れた。

日本企業の試掘の際に設立された現地の環境保全団体「インタグの生態系の防御と保全/DECOIN」の会長シルビア・キルンバンゴさんはこう指摘する。「当時のJICAの環境影響調査により動植物相の喪失、180家族の移動などが明らかになりました。鉱山開発の被害は開発予定地フニン村だけではなく多地域に及びます。この地方を流れるインタグ川は25の流域へ広がってゆき、周辺住民3000人の生活用水として使用されています。これと繋がるグアジャバンバ川は首都キトの排泄物が流れ込み、国内で最も汚染が進んでいます。インタグから流れるきれいな水や湿度がこれを緩和してはいるのですが、この川は海へと流れ、マングローブ林、魚やエビを取る多くの漁民の暮らしなどへも悪影響を与えています。インタグ川上流のトイサン山脈には地震帯が帯状に存在し、集中豪雨も多く、2010年にも道路が

浸水しました。自然災害で大量の固形廃棄物、汚染水が貯蔵施設からあふれ出すと、すべての機能は麻痺させられます」。鉱山開発反対者への圧力は強く、事務局長のカルロス・ソリージャ氏へのコレア大統領本人からの名指しの非難の他、このDECOINにも脅迫電話、追跡、ハッキングなど政府や企業による脅かしが常にあり「この悪夢は日本企業から始まりました。日本も多くの国々同様鉱物を大量に消費しています。この問題を認識してください。」という彼女の言葉が印象的だ。

首都キトから約110キロ北に位置するインタグ地方・コタカチ郡では、副郡知事のルット・アルメイダさんも「私達の組織は開発主義を求めているのではなく、インタグの住民の人権、民族自治、一人一人の独自の発展プロセスを尊重しており、反対運動に懸けています。ハビエル氏の逮捕同様、住民の同意に反して鉱山開発を行うのは深刻な問題であり、私達は対抗してゆきます」と語っておられた。キチュア系先住民族も多く暮らすこの土地では、その多様性において世界的にも貴重である環境文化を守るため2000年に「コタカチ環境保全郡、環境保全条例」が制定されている。地質学的、環境学的に見て政府の謳う「責任ある鉱山開発」は不可能であり、この土地に適した既存の産業での雇用促進を目的に、有機農畜産業促進のためのお祭り、エコツーリズム、温泉を使ったりハビリセンターの建設、環境に負荷の少ない小水力発電所の建設など10のプロジェクトがあり、鉱山開発の是非を問う住民投票も予定されている。

本来ならばこういった適正な産業形態の構築、古典的な開発主義から脱却をはかり世界へ手本を示すことができるのは生物多様性を誇り、斬新な環境保

護的政策をとってきたエクアドルのような国であるはずなのに、と私は口惜しく思う。

現地滞在中の2月10日にはハビエルさんの審問が、インバブラ県の県庁所在地であるイバラの地方裁判所で行われた。武器の使用がなかったこと、拘留中の態度が良かったことを理由に12か月から10か月へと刑期が軽減され釈放が決まり、幸運にもその現場に立ち会えた。地方裁判所前では地域住民の他、キトからの環境団体の若者など多くの人々が駆けつけていた。イバラの留置所までデモ行進が行われ、政府への批判の声が響き渡るなか、ハビエルさんは釈放された。彼の不在の間、不安な状況下を持ちこたえてきた家族は強く抱き合い、歓喜に沸く群衆に担がれ、両手を広げる彼の姿は住民への人権侵害といった苦境を跳ね除けてゆくような大きな希望を感じさせた。キチュア先住民族の祈祷の後、広場では全国先住民族組織CONAIEや環境団体らのオルグが続き、熱気に包まれた現地の晴れ渡った青空は人々の心を象徴しているようだった。

後日、フニン村でハビエルさんと従妹のマルシアさんから逮捕や村の状況について話を聞いた。

「(彼らの元弁護士であったホセ・セラルノ)内相の求めによる会談がキトで行われ、その帰路逮捕された。住民にパニックを起こす目的でワナをかけられたんだ。収容のイバラの留置場では定員の倍の600人が収容され、毎日シュロの紙を折る作業を続け、パン1個と汁だけのスープ、肉はほんのわずかで食事がつらかった…」とハビエルさんは笑いながら語ったが、すしずめの劣悪な環境は、かなりの困憊をもたらしたと思う。彼の拘留中、村では村人が集まるだけで逮捕される恐れがあり「住民が何かしたらハビエルの拘留が長引く」と脅かされたそう。昨年5月にはこのフニン村で300人規模の警察隊らによる強行突入が行われたが、村へ助けにきた70人程の仲間は引き離され、彼の家族も殴られるなど暴力がふるわれ、妻を含む住民ら数名が一時逮捕された。この間、警察隊によって買収された3家族

が多数の警官らに自宅を宿泊所として提供し大金を手にしたという。住民間の分断も意図的に進められている。滞在中にも、フニン村では開発賛成派の家では馬を連れた数名の警察隊が監視を続けていた。

「これが私達が現在耐えねばならないことだ。政府は金のことだけを考え傲慢な態度をとり、全体のためには少数派を犠牲にしてもよいと言っている。私達は街の人々の食物をつくり、それなのに権利は無いも同然だ、大きな不公平だ」と。

しかし現在、開発の電力供給のみを目的とした水力発電所の建設や道路整備が着々と進み、90箇所にもおよぶ試掘が迫っている。移譲されている土地は4838ヘクタールという広範囲に及び、フニン村では民家の近くで重点的な試掘が行われるという。2年前に私が見た90年代の日本の試掘地跡では現在もなお、重金属の混入による河川の汚染が続いている。フニン村を取り囲むように流れるフニン川、その川沿いにはユカヤトウモロコシ、サトウキビ畑がある。開発による自然資源の急激な減耗、他者の犠牲の上に成り立つ表面的な豊かさは、人間そのものの生存基盤の崩壊をも導くように私には思える。雲霧林の森で見た原色に輝く草花、夜明け前の虫や鳥、生き物たちの高鳴る鳴き声に、凝縮した生命の息吹を感じ、この土地の未来と存続を願わずにはおられない。

帰国後、ハビエルさんが自分の無罪を控訴したため、(免除された拘留期間を排除)新たに刑期が2か月延長されたという知らせが届いた。現在これに対し異議申し立てが行われているが、彼の弟のウーゴさんにも同様な「国家反逆罪」という罪状で逮捕状が出され、逮捕状を取り下げるには家族が何も(抵抗)しないことを条件とするといった心理的な圧力がかけられ、政府は20年間闘い続けてきた住民らの抵抗の意思さえも封じ込めようとしている。

日本ラテンアメリカ子どもと本の会(CLIJAL)の活動から パンも本もー児童文学研究・普及センター

日本にも子どもの読書を推進する活動のつみかさねがありますが、ラテンアメリカにも注目すべき団体があります。そのひとつが、アルゼンチン、コルドバ州のNGO、CEDILIJ (Centro de Difusión e Investigación de Literatura Infantil y Juvenil 児童文学研究・普及センター) です。CEDILIJは、IBBY (国際児童図書評議会) が児童図書の普及につくした団体に与える朝日国際児童図書普及賞を2002年に受賞しています。ちなみにアルゼンチンでは、12年にも北部のチャコ州を中心に活動する「おばあちゃんの読み聞かせ計画」がこの賞を受賞していますし、ベネズエラ、コロンビアなどの団体も受賞していますので、機会があればまたそのお話も。

CEDILIJは、ブエノスアイレスから700キロほど離れたコルドバ市にあります。イエズス会が設立し現在は国立となったコルドバ大学の法学部の古めかしい建物や、大聖堂などの歴史的建造物が残る中心街から少し離れ、カニャーダと呼ばれる石造りの美しい用水路にそって歩いた「アートのこみち」の一角にその事務所があり、図書館も併設されています。

そんりさ149号でもとりあげたように、1976年～83年の軍政下では、児童文学までもが検閲の対象となりました。それは、社会の秩序を乱す「過激派 subversivos」の影響から子どもたちを「守る」という“大義”のもとに行われたものですが、彼らの目的は、子どもたちから自由な想像力をうばい、自分の考えで行動できないようにさせることでした。このように国民の意識までコントロールしようとした軍事政権が終了し、民政が復活した1983年にCEDILIJは生まれました。

民主化後のアルゼンチンでは、国民識字化計画の一環として読書が推進され(1980年に6.1%だった非識字率は91年に3.7%に下がった)、それまでなおざりにされていた小中学校への本の配布や図書館などの整備が行われることになりました。また、80年から85年にかけて米州機構(OAS)がベネズエラのバンコ・デル・リプロと共同して行った米州地域児童文学プロジェクト(PILI)、コルドバ国立大学などともCEDILIJは連携してきました。



また、コルドバに児童文学に関心をもつ多くの人々がいたこともCEDILIJの誕生に一役買っています。中心となって活動が続けてきた市民はもちろん、コルドバ大学で教鞭をとり、自らも子どものためのおはなしを書いていた故“マリチャ”・レギサモンはCEDILIJのアドバイザーでしたし、軍政時代に検閲書のリストに載った「積み木の塔 (La torre de cubos)」の作者ラウラ・デベタチ、2012年に国際アンデルセン賞を受賞したマリア・テレサ・アンドルエットも、CEDILIJが過去に発行していた雑誌Piedra Libreに執筆するなどの協力をしています。

30年にわたるCEDILIJの活動は、教育関係者や司書などの専門家、保護者やコミュニティの人たちを対象としたもの、子どもに直接本を届けるもの、創作ワークショップなど多岐にわたっています。2014年1月6日づけのコルドバの地方紙La Voz del Interiorには、スイカや鮮魚、パンや手作りのお菓子の屋台に挟まれたCEDILIJの移動図書館が紹介され、道端で本によみふける子どもの写真が掲載されています。

「パンと本のどちらを子どもに先に与えるべきか？」と問われたら、「どちらかひとつだけを選ぶことはありえない。その両方を」と答えますと、CEDILIJの代表はIBBY朝日賞の授賞式のスピーチで述べたそうです。持てる者と持たざる者の格差がますます広がるのが21世紀だとすれば、このような活動の重要性も大きくなっていくことでしょう。そして、格差社会では日本の一歩先をいくラテンアメリカで、希望を失わずに活動している彼女や彼らから、私たちが学べることも多いのだと思います。

(伊香祝子)

CEDILIJのブログ <http://cedilijargentina.blogspot.jp/>

連載第56回 『ラ米百景』

伊高浩昭（ジャーナリスト）

上野英信の思い出

私が炭鉱夫出身の記録作家である上野英信(1923～87)に会ったのは1978年、那覇市の「ゆうなんぎい」という沖縄料理屋の2階でだった。友人の琉球新報記者、三木健が私を作家に引き合せたのだ。日本の炭鉱離職者の移住先であるラ米諸国を訪ねて書いた『出ニッポン記』を前年出版していた上野は、その姉妹編と言わなければならない本を書くためメヒコ、クーバなどラ米諸国取材する計画だった。那覇に赴任する前に8年余りメヒコ市を拠点にラ米諸国取材していた私に意見を訊きたいということで、会合となったのだ。

上野は小型のポストンバッグを畳に置くや、チャックをさっと開いた。何と、ピーカン(両切りたばこ「ピース」100本入り缶)がびっしり詰まっていた。上野は、その一つを取り出し蓋を開け、一本を咥(くわ)えて、店のマッチで火を付けた。吸い終わるや、たちまち2本目に火を付けた。そして3本目、4本目と吸い続けた。私と三木が驚いているのに気付くと、「ここを見てください。黄色いでしょ。脂が汗に混じって出てきます」と言って、腋の下を見せた。開襟シャツが黄色くなっていた。上野はさらに吸い続けた。「なーに、せいぜいピーカンを一日二缶ちょっとなら吸いません。こう嘯(うそぶ)く上野だった。

その年、上野はメヒコに行った。査証の都合からか、クーバには行かなかった。この旅を経て世に出たのが『眉屋私記』(1984年)である。1879年に日本に強引に併合された沖縄の人々が、どのような社会状況の下で暮らし、ヤマトウ(日本)や外国に出た者ほどのような運命を辿ったのか、という視点から文章が綴られている。「出オキナワ」を決行した者のうち、本書で代表格として描かれている山入端萬栄(1887～1959)の人生は波乱万丈そのものだ。

日本政府は明治期から業者と組んで「移民」という名の棄民政策を展開、1904～07年に約5000人の日本人をメヒコに炭鉱夫として送り込んだ。その一人である萬栄は1907年にサリナクルース港からメヒコに入った。萬栄の最終目的地は日本人移民を既に

制限していた米国だったが、彼はその手前のメヒコ北部コアウイラ州内の炭鉱に送り込まれた。萬栄は三年間、地底の激しい労働に従事した後、1910年9月米テキサス州への密入国を図って失敗、メヒコ市に出た。その年11月20日、メヒコ革命が勃発していた。翌年、独裁者ポルフィリオ・ディアスが国外に去って、フランシスコ・マデロ大統領の革命政権が登場する。ところがマデロは13年暗殺され、ビクトリアーノ・ウエルタが政権に就く。「帝政ロシアを1904年に破った日本の民」は、メヒコで革命戦争を戦う各軍団から兵力として引く手あまただった。だが萬栄はあろうことか、ウエルタの賊軍に入隊するのである。当時、三井物産はウエルタ軍に武器を売り込んでいた。萬栄は、パンチョ・ビーヤの率いる北部軍との戦闘のため北部戦線に送られた。ウエルタ軍は敗れ、カランサ政権が登場する。萬栄は1916年2月メヒコに見切りをつけてベラクルース港を出航、独立間もないクーバのラ・アバーナ(ハバナ)に着く。

萬栄は砂糖黍農場で働く。当時クーバでは、講道館を破門され巡業していた「コンデ・コマ」こと前田光世が柔道ショーを見せて、大人気を博していた。萬栄は偽柔道家として八百長ショーに駆り出されることになって逃亡、曲折を経てドイツ公使館に運転手として雇われた。そこで知り合ったドイツ娘の雑用係として1924年結婚する。当時クーバには日本人が500人いた。29年には800人に達する。萬栄には女兒マリーア=カタリーナ山入端が25年に生まれた。萬栄は27年、ハバナに入港した日本海軍練習艦「浅間」を訪艦する。話を急げば萬栄は、クーバ革命の成った1959年死去、72歳だった。

萬栄はメヒコ革命を兵士として戦い、クーバ革命戦争(1956～58)の時代にクーバに生きた。萬栄同様に数奇な運命を辿った日本人移住者は数知れない。上野英信は、生まれ故郷を遠く離れた移住者の生き方と死に様を愛の瞳で見詰め、記録した。その上野は1987年64歳で他界した。私がブラジルにいたときで、葬儀に行けなかった。あの恐るべきピーカンの凄まじい鎖喫煙が作家の命を縮めたのに違いない、と思い続けている。

ワイニョの広がり

ペルー・アンデスの中心的音楽であり、アルゲダスが「アンデス民衆の心」であると語ったワイノ。そのワイノという音楽が、ペルーだけでなく、より広範囲に演奏されている状況について今日は少し紹介してみたいと思う。

ワイノは、ペルー国内だけでも非常に多様性を持った音楽だ。そして、さらにその周辺にはワイノ属ともいうような音楽が多様に広がっている。このいわゆるワイノ系音楽がペルーの民衆アンデス音楽の中心に脈々と流れていて、それが都市部ではクンビアやロックと融合しながら、時に素っ頓狂なものまで含んだ展開を見せながら多様に多彩に花開いている。

ワイノは、歌い方、メロディライン、楽器編成、速度、リズムの訛り具合などで、聴くとだいたいどの地方のものかかわかるほど明確に細分化されている。また、ワイノとは異なる名前が付けられているワイノ亜種も数多くある。有名なものではアンカッシュ県のチヌスカダやチマイチ、アレキパ県のパンペニャ、プーノのパンディージャなどだ。フニン県のワイラスも広義ではワイノ系音楽の一つと言えるだろう。

そんなワイノ系音楽は、何もペルーにしかないわけではない。当然、国境の向こうのアンデス地域にもワイノ系音楽は広く連なって続いている。北の隣国エクアドルでは、ペルー同様ワイノという名前で愛されている。エクアドル・アンデスを代表する音楽サンファニート同様、和音で演奏する単列パンフ

ルート「ロンダドル」＝写真＝もよく使って演奏されているようだ。

南の国境を越えたボリビアでは、ワイノはワイニョと呼ばれている。いや、実はペルー南部の国境の町プーノからすでにワイニョと呼ばれるようになっている。ワイノがなぜワイニョになまるのか。実はおそらくワイニョのほうがより古い呼び名に近いのではないかと考えられる。ワイノが公式の記録に初めて登場するのは、17世紀初頭に編纂されたケチュア語の辞書だ。この辞書の中で、ワイノはワイニユとして記載されている。このワイニユがワイニョになり、ペルーにおいてはワイノとして定着していったのだろう。ボリビアのポトシ地方には、今でもワイニユと呼ぶ音楽が演奏されている地域がある。山深い北ポトシの農村部なのだが、鉄弦チャランゴで演奏されるその音楽も、紛れもなくワイノ属の音楽である。鉄弦チャランゴは農村部ほど好んで使われる傾向が強い。こうした古いワイニョ(ワイニユ)の片鱗を録音などで聴くと、さらにさかのぼって古い時代の音楽はどうだったのだろうかといろんな想像をしてしまう。

ボリビアのワイニョとペルーのワイノを比べるとやはりそこには違いが存在する。といってもそもそも両者ともに非常に多様な幅を持った音楽なので、その違いを一言で説明するのはちょっとむずかしいところもある。なので、一例として都市部で発達した民衆歌謡としてのワイノとワイニョを比べてみると、ゆらぎのあるリズムを好むペルーに対して、ボリビアは若干スクエアなリズムを好む傾向が強い。またボリビアは全土でほぼチャランゴが使われているのに対し、ペルーでは南部に限定されている。とはいえ、ワイノ系音楽としては同じ仲間なので、ペルーで流行った曲がボリビアの田舎でも普通に演奏されていたり、演奏している人たちもそれがペルーのものだとも思わずに歌っていたりもする。こういうゆるさが魅力的でもあるが、時に起源論争や作品の盗用などの問題として表面化したりすることもある。



ワイニョもペルー同様、ボリビアのほとんどの地域で演奏されている音楽だ。それだけにこちらも地方色が強く、聴けばこの地方の曲なのか明らかな物が多い。とは言え、最近の「フォルクローレ」スタイルのものは脱地域化が進んでおり、こういったスタイルのものに関しては地域性が払拭されてしまっているものも多く見られる。その意味で本来持っていた地域性が今も強く残っているペルーに対して、ボリビアは地域性が残ってはいるものの、その上に大きな「フォルクローレ」コンフント形式というフタがされているような状態になっており、入りやすいが地域的な特徴などが見えにくい傾向があるように思われる。

ボリビアのワイノ系音楽で私が好きなのがカルーヨと呼ばれる音楽だ。スクレ県からサンタクルス県あたりにかけて見られる音楽で、バジェ・グランデがその中心地だ。ギターとチャランゴ、アコーディオンを中心に演奏される。たまにトランペットやサクソなんかが入っていることもある。トランペットが入るとするのはワイノ系音楽の中ではちょっと異色で面白い。ワイノ系音楽の中でもかなり脱力系のけだるいリズムで、おっさんたちによってまったりと歌われる。ワルテル・オシナガ＝写真＝やロス・クアトロ・デル・バジェなどがその代表格だ。

それではさらに隣のチリで演奏されているワイノ系音楽はなんだろうか？チリで愛されているワイノの亜種としてはおそらくトロレーテがもっとも有名だろう。とは言え、日本のフォルクローレ愛好者が好きなトロレーテと現地で踊られてきた舞踊音楽としてのトロレーテはまったくもって別物といってもいい。地元のトロレーテは相当ワイノに近いが、日本やボリビアなどでいわゆる「フォルクローレ」のコンフントスタイルで演奏されるトロレーテの多くは、非常にテンポが早い疾走感を伴った



リズムに変形されている。加藤登紀子も歌ったチリのロス・ハイバスの「トードス・フントス」やロス・ライカスの「サンフランシスコへの道」などがとくに有名だ。実際にこのトロレーテが演奏されているのはチリ北部のタラパカ州を中心とする地域だ。また、ボリビアのポトシの一部でも鉄弦チャランゴなどで演奏されていたりもするようで、このあたりの連続性が面白いところだ。

一方、さらにお隣のアルゼンチンでは、北部のフイやサルタ地方周辺でカルナバリートと呼ばれるワイノの亜種が踊られている。フォルクローレ音楽でもっとも有名な「エル・ウマワケーニョ(花祭り)」＝写真＝は、このアルゼンチン北部のカルナバリートのスタイルで1943年に作曲された作品だ。53年にフランスのシャンソン歌手イベット・ジローが「花祭り」のタイトルで歌いヒットしたことから世界的に有名となった。今やフォルクローレ愛好者に知らぬものない名曲であるが、未だにシャンソンのタイトルで親しまれているというのも少し可愛そうな気がする。しかしまあ、それも曲に歴史ありということなのだろう。カルナバリートの有名曲としては他に「谷間のカーニバル」などもある。

こうしてみると、世界で最も長い山脈であるアンデス山脈のかなり広い範囲でワイノ系音楽が演奏されていることがわかる。地域によってはそれぞれの影響力は異なっているが、これだけ広い範囲で同じ系統の音楽がそれぞれの土地の色をまとうて演奏され続けているのは本当に素晴らしいことだ。ぜひみなさんもいろいろなワイノ系音楽を聴き比べて自分の心揺り動かされる私の心のワイノは○○だ！といえるような出会いがありますように！



ミゲル先生のメキシコ食巡り モトウル風卵料理

HUEVOS MOTULEÑOS

今回はユカタン州のモトウル市に伝わるモトウル風の卵料理です。簡単で安くおいしいのでおすすめです。

この料理は昔は今よりずっと単純な作り方でした。

ユカタン州知事だったフェリペ・カリーヨ・プエルトが、出身地で朝食をとったとき、ユカタン料理が出されました。ところが、知事と招待客のために朝食をつくった料理人は、古い時代の材料を使ったトマトソースとフリホールを添えたトルティーヤをつくり、さらに新しい材料も加えて、まったく新しい料理をつくりあげました。

フェリペ・カリーヨ・プエルトも招待客も、この朝食のおいしさに驚いたと言われています。

1916年6月2日、ユカタンに最初の社会主義政党が生まれました。米大陸ではじめて民主的な選挙で政権を獲得した社会主義政党として知られています。結成時は「労働社会党」、次に「ユカタン社会党」、最終的に「南東社会党」に改名されました。フェリペ・カリーヨ・プエルトとその兄弟は、結党当初からのメンバーでした。党の本拠地はユカタン州メリダ市にあ



りました。

1924年、極右の保守勢力は、州知事のフェリペ・カリーヨ・プエルトを殺害し、社会党を解散させ、同党を非合法化しました。

モトウル風の卵料理は、そのおいしさと、フェリペ・カリーヨ・プエルトをめぐる歴史によって、「労働者と農民の殉教者」の名で全国で知られるようになり、ユカタンを代表する料理になったのです。

私が子どものころ、登校前の朝食に、母がよく料理してくれました。ユカタンでは、金持ちも貧しい人も中産階級も、マヤ人もヨーロッパ人との混血の人も、あるいは外国人も、この料理をよるこんで食べています。

■材料 4人分

- ・トルティーヤ8枚か12枚（8枚なら1人2枚、12枚なら3枚）
- ・トマト大2個か、小4個
- ・ニンニク4片
- ・タマネギ1/2
- ・サラダ油か豚のラード
- ・水、塩、コショウ
- ・グリーンピース缶詰 小なら2缶、中なら1缶
- ・ハム（生ハムは不可） お好みで
- ・黒フリホーレスのペーストの缶詰1缶（まだらや栗色の豆でも可）
- ・コリアンダー（香菜）のみじん切り 大さじ2杯
- ・卵8個
- ・揚げたバナナをトッピングしてもよい

■作り方

- 1) トマトを洗って4つに切る
- 2) タマネギ半分を2つに切る

- 3) ニンニクの皮を取り除く
- 4) 上記の材料をミキサーに入れ、カップ半分の水と塩コショウを加え、よくまざるまで攪拌する。シチュー鍋に移して火にかける。足りなければ水を少しずつ加える。
- 5) 赤い色が濃くなり、とろみが出てきたら火を止める。
- 6) フライパンにフリホーレスの缶詰を入れ、カップ半分の水を加えて火にかける。焦げないように注意する。
- 7) グリーンピースの缶詰を水を切って器に入れる。
- 8) ハムを1センチ角に切る。
- 9) コリアンダーを刻む。
- 10) フライパンに油（ラード）を入れる。油大さじ1杯で、トルティーヤ2、3枚の表裏を軽く焼く。焼きすぎて硬くならないに注意する。
- 11) 卵を2つずつ、黄身をつぶさないように気をつけて焼く。
- 12) 大きな平皿に敷いた揚げたトルティーヤの上にスプーンでフリホーレスのペーストを塗り、その上にトマトソース、さらに火を通した卵と刻んだハム、グリーンピースをのせ、最後にコリアンダーを散らす。

コロンビア—続く地雷の被害

2012年から和平交渉をしているコロンビア政府とコロンビア革命軍（FARC）が今年3月、地雷や不発弾の撤去について合意した。国中から地雷を撤去するには数十年かかるが、コロンビア北東部のアンティオキア県アノリ地方のように地雷がたくさん埋められている地域では、人々は日々地雷の危険とともに暮らしている。

40歳の男性は3年前に、家の周りを掃除していた時に地雷を踏み、右足の膝から上を切断した。17歳の青年は、家畜を移動していて体のバランスを崩し、地雷に触れ、指を2本失った。アノリ地方ではここ25年間で死傷者は160人と県内で一番多い。同じ時期の全国地雷による死傷者は1万1000人にのぼる。

コロンビアはカンボジア、アフガニスタンに次いで世界で3番目に地雷の数が多く、アフガニスタンに次いで地雷による死者数が多い。国内最大のゲリラ組織のコロンビア革命（FARC）と国家自由軍（ELN）、右派準軍事組織があり、半世紀以上も紛争が続いている。強制移住させられた人もいる。アノリ地域ではコカが栽培され、不法な鉱山開発も行われている。ポルセ川には水力発電のための3つのダムがあるが、ダムや送電線、鉄塔などのインフラはゲリラにとってもこれを監視している軍にとっても重要な目標物である。FARCは2012年から政府と和平交渉を行い、昨年12月に双方の停戦が公表された後でも、地雷をばらまいている。探知が難しい新しい素材を使った地雷もある。子どもたちが、好奇心でこれらの地雷に触れる危険があるため、地雷に関する授業が行われている。ユニセフが教材を提供しており、子どもを通してアノリ地区の人々が地雷犠牲者が増え続けないために、何をすべきかを学ぶことが目的である。（BBCMUNDO/05/04/2015より）

アカプルコ—世界のリゾート地から危険都市に

世界的なリゾート地として有名だったメキシコ、ゲレーロ州のアカプルコは、現在では世界で三番目に危険な都市となっている。植民地時代にはベラクルスと並んで重要な港であったアカプルコは、1950年代からリゾートとして脚光を浴び、故ジョン・F・ケネディ大統領をはじめ世界の著名人が訪れ、エルビス・プレスリーの映画の舞台にもなった。が1970年代よりその地位をカンクンなどに奪われるようになった。その後インフラ整備も行われないうちに、2000年代に入ると麻薬カルテルなどが入り込み紛争の舞台に。世界で最も危険な都市の一つとなった。人口10万人あたりの殺人率で比較する「世界の危険都市」ランキングで、アカプルコは2013年と14年連続して3位となった（1位はホンジュラスのサンペドロ・スーラ、2位はベネズエラのカラカス）。2014年にアカプルコで殺された人は883人で、10万人あたり104.16人だった。経済が低迷し、失業者が多い事も治安悪化の原因だが、同時に麻薬密輸の拠点としての地理的な条件もある。アカプルコが米国への麻薬密輸ルートの一つだということと、近年では、周辺の山岳地帯でヘロインの原料となるケシが栽培されていることがあげられる。米国ではここ4年でヘロイン消費が65%増加し、メキシコはその主な供給国となっている。（BBCMundo.com 28/04/2015より）

エドゥアルド・ガレーノ逝去

エクアドルの作家、エドゥアルド・ガレーノが4月13日に74歳で亡くなった。『ラテンアメリカの切り開かれた静脈』（邦訳は『収奪された大地—ラテンアメリカの500年』1971年）は彼の代表作で、世界各国語に訳され、ラテンアメリカの社会正義を求める多くの人々に読み継がれている。マイノリティの視点にたち、ユーモアと皮肉を交えた独特の筆致で人々に知られていないことや忘れられているラテンアメリカの歴史を書いた。（Nacla.org 06/18/2015より）

6月27日にレコムの総会がありました。今回は大阪からすぐ近くの尼崎市の武庫川沿いにある、Casa de UME(カサ・デ・ウメ)というできたばかりのスペースを会場として行いました。カサ・デ・ウメという名前はレコム創立からのメンバーで、事務局長や代表も務め、2004年に急逝した梅村尚久さんにちなんでつけられたもので、人々が集い交流するためのスペースです。ここでレコムの総会を行ったのは故梅村さんを知っているメンバーにとっては感慨深いものでした。

レコムはこれまで主にグアテマラを中心とした活動を行ってきましたが、今回のソンリサ特集にもあるように、コロンビアやエクアドルの活動をしているメンバーなどの参加を得て、レコムの活動の中は広がっています。今後も『そんりさ』でその活動の紹介、そしてラテンアメリカについての記事を掲載していきますので、どうぞお楽しみに。(新川志保子)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で10月 日(土)、
発送は関西で10月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.152 グアテマラ視察報告

Vol.148 ナルコ・メヒコ

Vol.151 メキシコ・ナルコ回廊

Vol.147 サパティスタ武装蜂起20年

Vol.150 メキシコのアフリカ系

Vol.146 グアテマラ視察報告

Vol.149 コロンビア・アワ民族

Vol.145 アフリカ系パラグアイ人の今

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・手紙も

しくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

65万9794円

<グアテマラ基金>

120万2403円

(2015年7月現在)